江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当：土屋 薫

二〇二六年九月、私は登山行動が環境に与える負荷を検討する共同研究に参加するため、ネパールを訪れた。ここでは、その移動や滞在の中で目に留まったことを振り返りながら、人が見知らぬ場所に出会い、その土地の見方を変えていく過程について考えてみたい。

クラクションの街

カトマンズの道路を見て、最初に思ったのは、「これは、どうやって動いているのだろう」ということだった。信号が少なく、車もバイクも「我先に」争って進んでいるように見える。まず渋滞の中へ車の頭を突っ込み、次の作業の手順であるかのようにクラクションを鳴らす。その脇をバイクがすり抜け、その間隙を突いてまた別の車が入り込んでくる。

よくぶつからないものだと思う。もちろん、短い滞在で事故の多さが分かるわけではない。ただ、目の前では、危なっかしく見える動きが次々に連鎖している。渋滞で速度が出ていないこともあるのだろう。クラクションは、「ここにいる」「今から入る」と知らせる合図なのかもしれない。車幅の感覚と音で、運転する人同士がやりとりしているようにも見えた。



車とバイクが行き交うカトマンズの道路。クラクションの音が絶えない

私は、山へ向かう前から、既に街の動きに戸惑っていた。外から来た私には混沌と見える道路にも、そこで暮らす人たちには、何かしら判断の手がかりがあるのだろうか。

見えないルール

そんな道路を眺めているうちに、初めてニュージーランドでラウンドアバウト（信号のない環状交差点）に出会ったときのことを思い出した。信号がないのに、次々と車がやって来る。どのタイミングで交差点に入ればよいか分からず、「もう一生、別の道に行けないのではないか」と立ちすくむような気持ちになった。そのときは「交差点に進入するときは、右から来る車に道を譲る」という基本が分かると、目の前の動きが理解できるようになった。カトマンズの交通を同じ仕組みで説明できるわけではない。それでも、この経験を思い出すと、「私に見えていない何かがあるのではないか」と思えるようになった。

そう考えると、クラクションの音も少し違って聞こえる。うるさいと感じながらも、誰がどんな場面で鳴らしているのかが気になってくる。強引に見える車の動きも、その後で周囲がどう応じるのかを見たくなる。以前の経験を思い出したことで、目の前の道路を見る際の視点が変わったのである。

街の建物にも目が向いた。古い建物にも新しい建物にも、レンガが今も現役の材料として使われている。電柱の周りでは電線が絡まり合い、大きな鳥の巣のように黒い塊となっていた。日本で見慣れた電柱を思い浮かべても、うまく重ならない。どの線が何とどうつながり、どう手入れされているのか。分からないことが、その土地の暮らしについて尋ねたいことになっていった。

二日がかりの道

調査地へは、ジープに揺られて片道二日がかりだった。ぬかるみ、崖崩れ、冠水した道路を抜け、身体中をシェイクされるように揺られ続けた。目的地に着いたときは、まさに「ようやく着いた」という感じだった。

これまで国立公園を訪れるとき、私は目的地で何を見られるかを考えがちだった。今回の移動では、そこに着くまでの道も、場所を知る経験の一部になった。景観への驚きと、暮らしを支える道への関

心が、同じ旅の中で重なっていた。

地図の上では一本につながっている道も、実際に移動すると、その線の中に多くの時間と手間が含まれていることが分かる。距離の数字だけでは、この移動の感覚は伝わらない。訪れるだけでも、これほどかかる。その道を使って暮らす人や、物資を運ぶ人は、どのように日々の予定を立てているのだろう。私にとっては調査地へ向かう道だが、そこで暮らす人にとっては生活を支える道でもある。

登山行動と環境負荷の関係を考えるときにも、登山者の目に入る山の風景だけでなく、そこへ至る移動や、滞在を支える暮らしに目を向ける必要があると感じた。道を通る経験が、何を調べ、誰の話を聞くべきかを考えるきっかけになったのである。目的地の風景を見るときにも、揺られてきた道のことが頭に残っていた。



ジープで調査地へ向かう途中の道路。移動には片道2日を要した

毎日のダルバート

一〇日ほどの滞在中、ほぼ毎日食べたのがダルバートだった。これは「ネパールのカレー定食」といえば伝わりやすいだろうか。少し飽きるようでもあり、出てくると安心するようでもあった。かつての日本のスキー場や海の家を思い出した。カレーかラーメンか。選択肢は多くないけれど、何が出てくるか分かっていて、食べればひとまず落ち着く。そんな感覚があった。

不味いと思うものはほとんどなかったが、同じダルバートでも、確かにほかよりおいしいと思うものはあった。繰り返し食べるうちに、ひとまとめに「ネパールの食事」と呼んでいたものの中に、違いが見えてきた。食事の時間は、道路や移動に戸惑う滞在の中で、見通しの立つ時間でもあった。

日本の食堂を思い出したからといって、ダルバートを理解できたわけではない。それでも、自分の記憶を手がかりに、遠くの土地での食事に親しみを覚えていた。

場所から生まれる問い

今回の旅程を振り返ると、ネパールを見ている間、私は日本や、以前訪れた国のことも考えていた。見知らぬものに出会い、記憶の中から似たものを探す。しかし、よく見ると違う。その違いが気になり、もう一度、目の前のものを見る。

私がこれまで重視してきた「エピソード記憶」は、過去の出来事を、そのときの風景や感情とともに思い出す記憶である。今回も、交差点や食堂の記憶が、ネパールの道路や食事を受け止める手がかりになった。こうした記憶との結びつきを含め、場所の見え方や自分自身の理解が変わっていく過程を「場所経験」として考えたい。そして場所を知ることは、自分の暮らしを振り返ることにもつながってくる。

国立公園のガイドや解説にも、そのような接点をつくる働きがあるだろう。森や川についての説明が、利用者の身近な自然の記憶と結びつく。その記憶について話すことで、新たな対話が生まれる。自然、人の語り、文化や歴史が、自分の記憶や経験と結びつき、場所の見え方と自分自身への理解を変えていく。こうした関わり合いを、私は「協応」と呼んでおきたい。

心に残った経験が、必ず再訪や保全活動への参加につながるわけではない。それでも、帰ってから誰かに話したくなることや、次に訪れたら尋ねたいことが生まれる場合がある。国立公園の利活用を考えたとき、利用者数や満足度とともに、何に足を止め、何を思い出し、どんな問いをもち帰ったのかにも目を向けたい。

カトマンズの道路が実際にはどのような原理で動いていたのか、今も十分には分かっていない。次に訪れる機会があれば、運転する人に聞いてみたい。あのクラクションで、何を伝えていたのか。最初はただ戸惑って眺めていた道路に、今は聞いてみたいことがある。

土屋　薫●つちや　かおる
日本レジャー・レクリエーション学会理事、コミュニティ政策学会理事、青森大学社会学科、江戸川大学ライフデザイン学科准教授を経て、二〇一四年より江戸川大学現代社会学科教授。専門はレジャー社会学、レジャー教育。二〇二五年より江戸川大学総合情報図書館長。